

「多義性と一意性の考察」

□ (定義)

文書の形態的構成要素を、文書 \supset 文章(段落) \supset 文 \supset 連文節(句) \supset 文節 \supset 形態素 \supset 意味素とし、「意味ある最小単位」である「形態素」を単位とする。そしてその要素を「意味素」とする。

<「形態素」と「内容語」「機能語」>

「意味ある最小単位」である「形態素」とは、日本語品詞でいえば「名詞」や「動詞」、「助詞」、「形容詞」、「形容動詞」、「副詞」、「連体詞」、「接続詞」、「感動詞」、「助動詞」など「形態的品詞」であり、「意味的品詞」であれば後記の「表記記号の概説」にあるように「主語」や「述語」、「連用修飾語」、「連体修飾語」その他がある。これらを世界の言語文法などと比較／考慮すると、大きく二つに分けられる。「内容語」と「機能語」である。「内容語」とは、日本語では「名詞」や「動詞」その他を指し、事象や状態、観念などの意味を明確に表わし、「機能語」は、「助詞」や「接続詞」などを指し、文章の構成など文法的機能の役目を果たす。このように各国の言語を大別し、意味的に「まとめる」ことができる。それが Ontology であり、MMA (Multi_Media Annotation) 意味タグ) であり、これら多国語の「共通性」(共通意味概念)などを踏襲したものとして世界標準化 (ISO/IEC/MPEG-7) された。

<意味概念体系の定義>

一般に他国語も考慮し、単語とは「内容語」と「機能語」に分けられ、「内容語」それぞれには「意味概念」が存在する。すなわち、全ての単語には「意味概念」が存在するという事は、「万人が認める」公理として考えてよいであろう。具体的に言えば、人や鯨は「哺乳動物」という上位概念があり、カラスやウグイスには「鳥」という概念があり、鯛や秋刀魚は「魚」という概念に入り、桜や梅は「植物」という概念になる。また、「走る」や「歩く」などは「移動」という概念に属する。「風が吹く」や「雨が降る」などは「自然現象」という概念に入る。すなわち、必ず単語には意味概念が存在し、それも上位と下位の両方が存在する。上位の「魚」からみれば「鯛」や「秋刀魚」は下位概念になり、「鯛」からみれば「魚」は上位概念になる。また、最下位概念である単語 (w_n) にもそのまた下の概念である「なし」という「ゼロ概念」($w_{n+1}=0$) が存在し、最上位概念である単語 (w_0) にもそのまた上の概念である「トップノード」と云われる「概念」($w_{-1}=0$) が存在することになり、全ての単語には上位／下位概念が存在する。これらは従来の考え方という「意味概念体系」という「膨大な辞書」として形付けられ、「シソーラス辞書」と「知識ベース辞書」として分けられていた。しかし、特に「シソーラス辞書」などは典型的な「ツリー構造」であるため、単語同士の曖昧な上下概念関係や重複する概念などなど「完全なツリー

構造」を保つことができず、実際に使うまでには至らなかった。

「機能語」は、後で詳細に定義するが、「内容語を修飾し、または文の構成などを明示し、文法的機能を果たす。」ことが役割となり、意味概念は存在しない。

なお、後記の（「意味概念体系」の例）に従来の体系例を記しましたので、ご参照下さい。

<多義性の定義>

上記の<意味概念体系の定義>にも出た「単語」と言われているものをもう少し厳密に定義すると、「形態素」の中の「名詞」や「動詞」、「形容詞」、「副詞」などを指し、特にここでは「単語」といったら「名詞」と考えて結構です。単語の意味も「一意性」があるものやないものやまちまちである。そこで基本的に単語の「多義性」とは、「単語の意味を構成している意味成分の構造が相違している」場合をいうと定義する。すなわち、意味成分自体は同じであるが、構造が違ってくれば意味も違うことを指し、特に意味成分の中心となる「基」である意味素は変わらず、周りの意味素の構造が回転や順序相違で変わったために多義性が現れている場合が多い。

<同義／類義／関連語の定義>

多義性は、同一意味成分の「構造の相違」が「意味の相違」であったが、「同義語」は、その逆で「単語の表層レベルの表現が違っていながら、同一な意味成分で同一な構造をしている単語をいう」と定義する。「類義語」は、相違する表層レベルの表現で、意味概念体系のノードレベルが同一である、すなわちその単語の上位概念の直下位概念レベルの単語群を対象に、意味成分の中でその単語の「核」（定義は後記する。「基」とは違う）となる意味素群を持っていることと定義する。そして、「関連語」は、その単語の上位概念の直下位概念に位置されている意味概念体系レベル上で、上記「類義語」を除いた単語をいう。また、「類義語」や「関連語」においては、その単語の意味成分の構造に類した単語などは、意味概念体系の同一レベルでなくてもそれに属するようになる場合がある。それは後記する単語の意味成分の行列の順序により処理され、この理論の良さが滲み出ているものとなっている。

<係り受けの定義>

「係り受け」とは、構文解析のことであり、特に日本語は英語や欧米語と違って「係り受け」だけで構文解析がなされる。「係り受け」の最小単位は、「文節」ごとであるが、「連文節」や「文」などにも「係り受け」の関係が発生する場合もある。しかし、それらは全て「文節」の集合と考えることができ、「係り側」と「受け側」とに分けられる。この「係り側」も「受け側」も一対一の対応もあり、一対複数、複数対一もある。「係り受け」の意味的定義とは、「係り側の単語は、受け側の単語の意味的制限を有し、その制限範囲や類は、係り側の単語に属している意味的・機能的役割による。」と定義される。すなわち「係り側」から「受け側」への「写像」であり、写像関数は係り側と受け側との共起関係によるものと考えられる。他に<文章間並びに文間の意味的関係の定義><照応関係に関する定義>などがある。（第1版）

[⇒ cTag>意味位相空間ページへ](#)